大野恵理著（有信堂　2022年）『「外国人嫁」の国際社会学　「定住」概念を問い直す』

澤田佳世*

「外国人嫁」の「ホーム」はどこにあるのか――本書は、日本の農村・地方都市（外国人散在地域）の結婚移住女性を対象に、移住女性のモビリティと「移住先社会に埋め込まれた非対称なジェンダー構造」（3頁）をとらえ、移民研究における「定住」概念を問い直すことを目的とする。新潟県A市に暮らすフィリピン、台湾、韓国、ベトナム出身の結婚移住女性の生活の現場を主なフィールドに、半構造的インタビュー調査を軸とする質的調査の手法とフェミニスト地理学の「ホーム」という概念を分析概念として採用し、「移動する主体」としての結婚移住女性が、「『ホーム』に内在する非対称な権力関係に影響を受けながらも、主体的な行為により居場所を持つことで『定住』する」（205頁）複雑で動的な過程を丹念に描き出す。

本書は、2020年3月にフェリス女学院大学に提出された、著者の博士論文を加筆修正し書籍化したものである。著者はアカデミアの世界だけでなく、ベトナムで日本語教師として働き、日本で「外国につながる子どもたち」の学習支援に携わりながら（225頁）、学術界と当事者の現場を往還する中で、本書のテーマに関する問題意識と分析の視座を洗練させてきた。

本書の構成は、序章での問題提起を受け、第1章で移住女性の「定住」と「ホーム」をめぐる理論的枠組みを検討し、第2章での中山間地のフィリピン出身の結婚移住女性、第3章・第4章での平野部で生活する結婚移住女性の居住の力学の事例分析を経て終章へとつづく。以下、各章の概要と論点を追う。

序章「本書の問題意識／結婚移住女性をめぐる国際移動研究」では、まず本研究の背景にある問題の所在として、日本の移民研究における外国人集住地域への関心の偏重、ならびに農村・地方都市の国際結婚や結婚移住女性とその「定住」をめぐる議論における「外国人嫁」として位置づけられた移住女性のモビリティと主体性の不可視化、結果としての静的で受動的な「定住」という理解、移住女性の「居場所」における権力関係の看過等が指摘される。先行研究の批判的検討をふまえ、本書では「『定住』を段階的なものとはとらえず、『移動する主体』である移住女性たちが、居住する地域社会において公私領域の社会関係で『ホーム』を持つようになる行為ととらえ」（20頁）つつ、「居場所」の中の権力関係にも着目することで、女性の行為主体性と社会構造の相互作用において展開する結婚移住女性の「定住」のリアリティへの接近が目指される。

次に、研究目的を達成するための具体的な研究課題として、「課題①『結婚移住女性はモビリティをどのように発揮して居場所を見出したのか』」（20頁）と「課題②『結婚移住女性の居場所には、どのような権力関係や構造が埋め込まれているか』」（21頁）が提示される。主に分析対象とするのは、フィールドワークに基づく東・東南アジア出身の結婚移住女性（17名）および地域住民への聞取り調査や関係機関における参与観察等で得られた質的データである。

第1章「移住女性の『定住』をとらえる――『ホーム』をめぐる理論的検討」では、移民研究における男性・労働移民を主な対象とする「定住」議論の限界を指摘し、フェミニスト地理学の知見を援用した「ホーム」概念から結婚移住女性の「定住」をとらえることの有効性が検討される。移住過程における「ホーム」とは、出身社会、故郷や出身家族のほか、移住先社会

*奈良女子大学　生活環境科学系

DOI：10.24567/0002003786

でアイデンティティや帰属意識と関連付けられ作られていくものであり、複数性と絶え間ない可変性をもつ場所であるという。著者は、「ホーム」概念を用いることで、移住先社会の空間や場所がジェンダーや社会階層、エスニシティといった「社会的カテゴリー」によって差異化されていることを理解しつつ、移住先の公私領域における諸活動の実践の過程に、結婚移住女性の主体化と「定住」を認識することの必要性を主張する。

第2章から第4章では現地調査に基づく事例研究の結果と分析が展開する。第2章「農村空間のジェンダーと『ホーム』」では、中山間地の農村における「農村花嫁」と呼ばれたフィリピン出身の結婚移住女性に注目し、行政主導による国際結婚のジェンダー化された移住過程、移住後の農業・農外就労の取組みを通じた地域住民との関係性の構築、その先に拡大する出自家族・出身社会とのネットワーク等をとらえ、ローカルとトランスナショナルな空間の双方に存在する複数の「ホーム」、およびその獲得過程にみる「嫁」としての地位と役割の多義性が検討される。

第3章「地域社会に埋め込まれたジェンダーと『ホーム』」と第4章「移民ネットワーク内のジェンダーと『ホーム』」は、平野部で生活する結婚移住女性の「定住」経験を分析対象とする。第3章では、家族関係に困難を抱え市街地に暮らす台湾と韓国出身の結婚移住女性が、家族やコミュニティからの「離脱」を経て、地域社会に居場所(朝市や多文化交流センター)を見出していく過程が論じられる。第4章は、繁華街を生きるフィリピン出身の結婚移住女性に焦点をあて、「ホーム」として機能していた社会的ネットワークを「離脱」し、新たな「ホーム」として同胞女性や日本人住民との間に個人的ネットワークを構築していく過程を描き出す。なお、第3章・第4章で取り上げられた「ホーム」としての居場所やネットワークには、非対称的な権力関係が内在することが指摘されている。

本書は、結婚移住女性の「ホーム」をめぐる形成と移動の過程に、農村や地方都市における「定住」の動的展開をとらえる。終章「『ホーム』をめぐるジェンダーとモビリティ」では、本論で展開した議論を本研究の課題①②に対応させて整理し、結婚移住女性にみる「定住」概念の再考と分析概念としての「ホーム」の有効性が改めて検討される。一方、本書における「ホーム」概念の援用には、現場と理論の言葉にやや乖離がある印象もある。「定住」過程にある居場所やネットワークを、調査対象女性自ら「ホーム」と意味づけたのか。彼女たちの意味世界における「ホーム」とはどのようなものか。並列的な複数性だけではない「ホーム」の重層性や可変性含め、「定住」する移住女性の主体的意味づけのもと、国際社会学的な移民研究で議論されてきた居場所やネットワークについて、「ホーム」として概念化する意義を検討する余地があろう。また、「ホーム」形成とその移り変わりの契機となる生殖と「定住」との関係についても研究展開を期待したい。少子高齢化と称される第二の人口転換のアジア的現象として、出生性比の男児優勢化と国際結婚の増加がみられるが、日本は出生性比においてこの例外にある。子どもの性別や数は結婚移住女性の「定住」過程にある複数の「ホーム」にとって、どのように多義的な意味をもつのか、著者の考察に触れてみたい。